

おわりに

33年に及ぶ国語教育実践の中核にあるのは、国語科に対する学習者の興味・関心の喚起ということであった。「楽しく、力のつく」国語科の授業創りに向けて常に心がけてきたのは、いかに魅力ある教材を発掘し、そのうえでいかに魅力ある授業を構想し、実践するかという課題にほかならない。序論で取り上げた『『学び』から逃走する子どもたち』（佐藤学）は、学校における「学び」に興味・関心を抱くことができないために、「学び」とは異質な場所へと逃走していった。彼らの後を追いつめてその場所を探しに出たとき、まずサブカルチャーに分類されるいくつかのメディアが視界に入った。わたくしは、強制的に「学び」へと連れ戻そうとするのではなく、彼らが逃走した場所に新たな「学び」を立ち上げるという方略を考えた。その具体的な方略が本研究の基盤にある。サブカルチャーを「境界線上の教材」として教材化し、その教材を効果的に扱う工夫を「国語教育の戦略」として提案することによって、具体的な授業実践を問い続けてきた。この「戦略」によって、子どもたちが再度「学び」に関わることができるようにしたい。わたくしは常にそのような目標を掲げてきた。

現代社会とともに学習者は変容し、また学習者のことばも変容しつつある。これからの国語教育では「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」のみにとどめずに、「見ること」や「描くこと」をも含みこんだ多様な領域を考えて、学習者の指導に当る必要がある。そして国語科で扱う学力を、単にことばのリテラシーのみならず、映像や音声を含めたマルチ・リテラシーとして捉え直したい。ただし大切なのは、決してことばから離れることなく、常にことばとの接点を明確にするということである。

本研究には、わたくし自身の実践を多数収録した。平易な記述を通して、具体的な実践を明らかにしてきた。当然のことながら実践の前提には理論があり、多くの先行研究・先行実践から得た様々な蓄積がある。その一つひとつを、授業構想の過程でしっかりと踏まえてきたつもりである。

33年という年月の間に、子どもたちの現実はもちろん、国語教育に関する様々な状況は大きく変化した。本研究では、その折々の問題意識から出発した考え方をもとにしてまとめてきたことから、発表当時の考え方を一部修正したり、また新たな事項を追加したりする必要があった。可能な限り普遍的な問題意識として提案したつもりであるが、今後さらに全体的な見直しをして、新たな提案を続けたいと思う。

これまでの国語教育の研究と実践において目標の中核としてきたことを、たいへん拙い形ではあるが一本の論文にまとめることができたのは、厳しくも温かいご指導をいただいた恩師を初め、学会・研究会などの場所でともに学んできた多くの先輩、仲間、そして後輩の御蔭である。深く感謝の気持ちをお伝えしたい。特に論文の作成に際して直接ご指導を賜った浜本純逸先生には、深甚なる謝意を表する次第である。国語教育の勉強を始めたころから、わたくしはいくつかの学会を通して浜本先生に長くご指導を仰いできた。そして何よりも幸運なことは、母校の早稲田大学という場所で直接ご指導いただける機会に恵まれたことである。本研究をまとめるに際して、浜本先生からお導きいただいたことは、すべて貴重なことばかりであった。

本研究はわたくしにとって新たな出発点である。今回まとめたことを一つのステップとして、大学・大学院での教育・研究活動に取り組みたい。本研究では、国語科に対する学習者の興味・関心を喚起するための方略を探ってきたわけだが、国語教育の研究および実践は、わたくし自身にとってまさに興味・関心の尽きない課題である。